

環境と仏教

一 郷正道

はじめに

みなさん、こんにちは。一日の授業を終えて大変お疲れのことと思いますが、この会にご出席頂きましてご苦労さまです。

今日は「環境と仏教」という題を出しておきましたが、みなさん方の中には、「なんで仏教が環境と関係するのか」と怪訝な思いを持つていらっしゃる方が多いんじゃないかと思います。ご存じのことと思いますが、最近では環境問題というものが、地球温暖化と共に地球的規模で非常に深刻な問題になっているわけです。環境問題が深刻

になればなるほど、実はそれが我々人間の命をむしばんできているというのが現実でありますから、その深刻さがますます増してきているわけです。それこそ五条通りにおいても大変な交通量ですね。たくさん車がいつも排気ガスをまき散らしながら、さらに騒音を立てながら、行き交っているわけです。そのためでしょうけれども、大変不景気だと言われながらも、自動車会社はエコカーというものを盛んに開発しまして、それを一生懸命売ろうとしているということを、しばしばテレビの宣伝なんかで我々は見ているわけです。しかし、このエコカーがいくら広まったとしても、環境問題が解決するようには私には思えません。結論的に環境問題というのは、実は、我々の心の問題であるという、そういう認識をしております。心の問題というのは、正に仏教が対象にすることでありまして、ですから、今日ここにタイトルに掲げました「環境と仏教」というのは意味のあるものになるわけです。そして、私自身は仏教の教えこそが現在の環境問題を考え、見直していく大きな役割を果たしてくれる宗教だというふうに確信しております。それで今日はこのような講題を出したわけですが、しかし私自身はこのような問題の専門家でもありません。たまたまこのよう

環境と仏教

な問題に関して、大変優れた論文、書物に出会うことができなかったので、今日はそれを頼りに、この問題を考えようと思っっているわけですが、とりわけ、間瀬先生の『エコロジと宗教』（岩波書店 一九九六年十一月）の第一章「へ自然支配」からへ自然との共生へ」の内容、その論述構成は、私の着想と等同でしてしかもはるかに充実した内容でしたので、先生の表現、文言をもそのまま拝借して話をすすめておきたいことをまずおことわりしておきます。恥ずかしいけれども今日のお話は、私自身のオリジナルのものとは全然ないと言っつていいかもしれないと、はじめに白状しておきたいと思います。

今日のお話のために利用させていただいた優れた論文、参考書は次の如きものです。

原實（研究代表者）『古代インドの環境論』科学研究費補助金研究成果報告書（二〇〇九年三月）

原實「不殺生考」国際仏教学大学院大学研究紀要第1号（一九九八年三月）

杉本卓州『五戒の周辺』平楽時書店（一九九九年二月）

L. Schmithausen, *Buddhism and Nature*, The International Institute for Buddhist Studies 1991

L. Schmithausen, *The Problem of the Sentience of Plants in Earliest Buddhism*, The Interna-

tional Institute for Buddhist Studies 1991

長尾雅人「維摩經」を読む」岩波書店（一九八六年七月）

どうかみなさん方も機会があれば、このような書物、論文に触れて頂ければいいな
あと思うわけであります。それでは、お配りしてありますプリントに従ってしばらく
お話させて頂くことに致します。

I 環境の現実

まずは、間瀬先生の本に引用される笠木透さんの「私の子供たちへ」という、お父
さんとして子供に対するメッセージ、それをまず読んでみたいと思います。

生きている鳥たちが

生きて飛びまわる空を

あなたに残しておいてやれるだろうか

父さんは

環境と仏教

生きている魚たちが

生きて泳ぎまわる川を

あなたに残しておいてやれるだろうか

父さんは

生きている君たちが

生きて走りまわる土を

あなたに残しておいてやれるだろうか

父さんは

目をとじてごらんなさい

山がみえるでしょう

近づいてごらんなさい

こぶしの花があるでしょう

（笠木透「私の子供たちへ」）

というふうには、笠木透さんはフォークシンガーでもあられるようですが、このように、公害のない空とか、あるいは川、土を残すということを子供に約束しているわけです。それをこのように歌っているんだと思います。

時代はうんと昔に遡りますけれども、良寛というお坊さん。江戸時代の末期に新潟におられた禅宗のお坊さんの良寛にもこんな歌があります。

形見とて何を残さん春は花

山ほととぎす秋はもみじ葉

という歌です。良寛さん自身は、自分で何か形見として残せるものは一つもない。ただ、自分が死んだ後にも春になれば桜の花が咲く、夏にはホトトギスが鳴く、あるいは秋になれば紅葉が美しく色鮮やかに……こういう自然、それだけはなんと少しでも残したい、それを自分の形見にしたいものだという気持ちを歌っているんだろうと思いますね。

言い換えますと、笠木さんの歌で一番分かりやすいかと思えますけれども、それほ

環境と仏教

ど現代の日本の環境というものは深刻になっていて、まさに自然をあるいは環境を汚染し、破壊せんとしているという、そういう証拠になる歌だろうと思うんですね。

ところで、日本人は一般に非常に自然を愛する国民であると、自然と一体となって生活していく、生活の中に自然がとけ込んでいる、そういうような生活をする国民だと思われてきていると思うんですが、どうも実際はそうなっていないんじゃないかならうか。

日本という国は近代文明というものを西洋から採用した優等生であったと言っていると思うんですが、その日本が実は皮肉なことに自然破壊においても優等生になっているんじゃないかならうかと、そんな気がしてならないわけです。自然に対する我々人間の犯してきた無責任な行動が、自然を破壊し、その破壊によって我々人間自身も自滅の道へ今落ち込んで行こうという、それが今の現実じゃないかと思えてなりません。人間が必要以上に便利さを求めれば求めるほど、逆にかえって我々の生活そのもの、我々の命を脅かすようになっていて、というのが現実ではなかならうかと、そのように認識しているわけでありまして。こんな環境問題の厳しさというものを一つ頭に置

いて頂きまして、今から人間と自然との関係、関わり合いといったことを少しお話ししてみようと思います。

Ⅱ 西欧の自然観

まずは、西洋の自然観というところに入ります。皆さま方は、「人間が自然を征服する」というこの言葉、表現を耳にして、どんな感情を抱かれますか。この「人間が自然を征服する」という、これほど傲慢な表現はないように私は思えるんですね。まさに人間の「おごり」というものを示している表現に思えてなりません。逆に今は、それを「おごり」と感じない時代になっているんじゃないかと思うんです。どうも西洋には、自然というのとは人間のためにあるものだと、だから人間は自然を思いのままにこれを利用していいんだという、非常に強い伝統、考え方があったように思えてなりません。なぜ、それでは西洋の人はそういう考え方になってきているのか。その論拠はそのプリントに示しておきましたように、キリスト教の『旧約聖書』の中の一文

環境と仏教

にあると言つてまず間違いないと思います。これは私が言うのではなくて、西洋人自身がそういうことをおっしゃるわけです。聖書のどの文言かと言いますと、「創世記Ⅰ―28」です。

神はわれらを祝福して言われた、「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ。また海の魚と、空の鳥と、地に動くすべての生き物とを治めよ」

そういう言葉が見られるんですね。これは明らかに自然に対する人間の優位性と言いますか、そういう考え方を示す一文だと思っわけです。ですから、自然というのは人間の支配と征服に委ねられたものである、自然がモノ扱いされてしまっている。ですから人間は自分たちが快適で合理的な生活を追い求めて、自然を征服し開発していく、それを利用し加工していくことは良いことなんだと教えているように思えてならないんですね。

ところが西洋人の中にもそういう考え方ではない人もいたようであります。「創世記Ⅰ―24」に対して、次のような文言が『旧約聖書』にはあるからです。実はそうじゃないんですね、と言う人もいますね。同じ「創世記Ⅱ―15」でありますけれど

も、

主なる神は人を連れて行ってエデンの園に置き、これを耕させ、これを守らせられた

という言葉が『旧約聖書』に見られます。Ⅰ―28の「地を従わせよ」というこの言葉は、信託、委託を意味するんだと。その場合の「地」というのはエデンの園を指すのであって、そこを耕し、守るということを述べているわけですから、あくまで人間中心じゃなくて、神中心の考え方がそこにはしっかり述べられているんだと、そういうふうには、最初の「創世記Ⅰ―28」を理解しなさいよ、という考え方があったようですね。そうしますと、後の考え方でいきますと、人間が信託、委託を委ねられているとしますと、「創世記Ⅰ―28」の文言というのは神中心であって決して人間中心ではないんだと。土地を耕して土地を守るということが人間に託されたことなんであって、決して、自然を支配して治めることが人間に託されているのとは違うんだという、そういう解釈があったようであります。ですから、エデンの園で土地を耕しながら、これを守るといのは、人間による文化の創造ということになるわけであります

環境と仏教

から、決してこれは悪いことじゃないんだ、というような考え方があったようです。

同じキリスト教の流れのなかにおいて、一方は「I-28」の文言を、人間中心の自然開発、支配を許す、ととる考え方。他方、ユダヤ・キリスト教の流れを汲む人たちは、あくまでも神中心であるから、そこに環境の危機的状況というものの根元を求める、自然破壊の理由を求めるのは間違っているんだというふうに考えているわけです。

それでは人間に対する傲慢さというか尊大さはどこからきているのかと申しますと、実はギリシャのストア学派の影響によって、同じ文言が人間中心に考えられるようになっていっているのではなからうかという解釈が出てくるわけなんです。何故かと申しますと、キケロという人がいたんですが、彼は、ストア主義の代弁者でバルバスという人をして「存在するものはなんであれ それは人間のために造られたものなんだ」ということを『神々の本性』という書物の中で言わしめているんです。ですから、そうしますと、このキケロの考え方の流れが「創世記I-28」の解釈を、人間中心のものにし向けてしまうということになったんだということですね。それが実は

『新約聖書』のパウロという人の文言に、明らかにそういう考え方が伝わっているんですね。「コリント人への第一手紙」（IX 9—10）をちょっとご覧ください。

モーゼの律法に「穀物をこなしている牛に口籠をかけてはならない」と書いてある。神は、牛のことを心にかけておられるのであろうか。それとも、もっぱらわたしたちのために言うておられるのか。もちろん、それはわたしたちのためにしるされたのである。すなわち、耕す者は望みをもつて耕し、穀物をこなす者は、その分け前をもらう望みをもつてこなすのである。

こうして「万物は人間のために造られた」と解する点に、ユダヤ・キリスト教の尊大さがあるとすれば、その尊大さは実はギリシャ・キリスト教の影響であったと考えられる、というわけです。

しかし、いずれにいたしましても、このキリスト教の伝統の中に自然に対する人間の優位性、人間中心の、いわば自然と人間の二元論的見解があるということは間違いないと思います。普段、我々も、とかく人間の世界と自然とは別のものなんだと、分離しているものなんだというふうな考え方が強いんじゃないかと思いますが、どうも

環境と仏教

それは西洋の典型的な伝統であると言っていいと思います。さらにそういう考え方が近代になって強まってきたのは、そこに書いておきました哲学者たちの考え方にも、実はそういうことを促す、指示するような発言が出てきているんです。まずはベーコンという人がおられまして、この方は近代科学の先駆者と言われる人ですが、このフランス・ベーコンが「知は力なり」というふうに宣言しているんです。つまり「知」というのは理性的認識でありますから、それは「科学」そのものです。その「科学」によって自然を支配することが可能だということをもベーコンは言っているわけです。そのベーコンの「知は力なり」という信条が、実は、万物に対して人間が支配者であることを確立することになってしまったといっても言い過ぎではないと思います。そのため的手段として、科学というものがあつて、だから尊敬されるべき手段なんだという考え方がベーコンによって打ち立てられてきたというわけです。

さらにこのベーコンの考え方を受け継いだのが、実は、近代哲学の父といわれるデカルトですよ。デカルトは人間というものを「自然の主人であり所有者である」というふうに言いまして、人間と自然との二元論、物心二元論ということも打ち立てた

わけです。「物質」というものは延長とか広がりということを本質とするものであり、一方の「心」「精神」は思惟、思考を本質とするわけですから、物と精神は別のものなんだという二元論がデカルトによって確立されるという、極めて大ざっぱではありますが、そういう流れになってきたわけです。デカルトの言う物心二元論によれば、自然というものは、空間的広がりや運動というものからなるものですから、まさに機械的な存在物になってしまふ、自然というのは機械的な世界になってしまふと見なされているわけです。これがいわゆる近代の「科学的自然観」としてすっかりと根付いて、人間は自由自在に自然に手を加えて、自然を所有して、自然を搾取して、そして乱開発をするということが思想的に公認されてしまふ、認められてしまふということになってるのが現代だろうと思うんです。

しかし西洋の中にもそれに対する反省の気運というのが生ずるわけでありまして、それが今では「エコロジーの神学」という言葉があるんですが、そういう言葉で言われるような考え方がキリスト教の流れの中からも出てきているんですね。それはどういう考え方かと言いますと、そこにちよつと記しておきましたが、ジョン・カブ・ジ

環境と仏教

ユニアという人が言い出したんですが、「新しいキリスト教は、人間の絶対性を捨てて、人間を頂点とする健全な生命体ピラミッドの構想を採用しなければならない」と。人間の自然に対する優位性というものを一つ見直そうという気運が、西洋のキリスト教の教えの伝統の中にも今生まれつつあるということです。そうしますと、新しい神学の流れの中にある考え方というのは、人間と自然との関係を、支配者と被支配者という関係として見ていくのではなくて、共生ですね。共に生きる関係でもって自然と人間の関係を見ていかなくはないという考え方になるわけですね。そうしますと、そういう場合の人間というものがどういうものとして見られるかと言いますと、人間は他の被造物と共に生きるために連帯と管理をゆだねられた、神に対する「信託者」として考えられようとしているわけです。支配者を神の信託者と言い換えることによって、一番最初にご紹介した『旧約聖書』の「創世記」の文言にみられる自然観をのりこえようとしている、そういう流れが今あるんだということです。そんなことの具体的な表現として「土地倫理」という言葉が言われています。これは、土壌、土をいたわるべきパートナーと見なす。決して収奪されるべきような「囚人」と

して見なしてはいけない。あるいは「自然権」。これは、物言わぬ自然にも生存の権利があるはずだと、だからその権利を代弁して保護していくのが人間の自然に対する責任だという考え方。あるいは「公共信託論」というのがありまして、人間は未来の世代のために、あるいは自然自体のために環境を保護することを信託されているんだということが強く言われる。あるいはまた、「サクラメンタリズム」という言葉があらまして、自然を神聖なものとして見なしていこうという考え方ですね。

こんな具合に『旧約聖書』の「創世記」の文言に種々な解釈をほどこして、人間の優位性を主張してはいけないんだという社会からの要請、それに対する解答として、西洋ではこのような考え方がだんだんと広まっているということをまず間瀬先生のご本によってご紹介しておきました。

それでは、翻って、我々東洋人はどのように自然を見ていたのかという話に移っていききたいと思います。

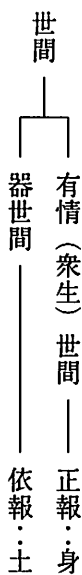
環境と仏教

Ⅲ 東洋の自然観

（一）「身土不二」「依正不二」

そこにまず「身土不二」「依正不二」という難しい言葉を出しておいたんですが、こういう言葉が東洋にはあるんですね。つまりこれは、我々人間、あるいは仏様や菩薩として受ける身体と国土は二つとしてないんだと、別のものではないんだと、そういう考え方ですね。依正不二…これは、過去の業の報いとして得た有情の身を正報、その身が依りどころとする環境すなわち国土（器世間）を依報とあって、それは別のものではないんだという考え方があるんです。しかも、インドでは「俱舍論」という書物を見ますと、世間というものを「有情（衆生）世間」と「器世間」とに分類するんです。「有情世間」というのは命を持ったもの、生きとし生けるものことであり、それと「器」は「うつわ」でありますから、それを支える世界、だから、生き物

が住んでいる場所、それが「器世間」ということになりますね。生き物とそれが住む場所、国土というふうには、世間というものを分類しているわけですが、それを前の「身土不二」「依正不二」という言葉に対応させますと、「依正」はちよつとややこしいかもしれませんが、「依」といのは「よりかかる」という意味ですね。「正」といのは自分が過去において行ったその結果として自分の命があるわけで、その命、それを「正報」というわけです。その私たちの命が拠り所としている場所、それが「依報」と表現されるわけです。したがって、インドの『俱舍論』という書物に出てきている「有情世間」という言葉と「器世間」というものを対応させますと、「有情世間」の方が「正報」、つまり身体。それから「器世間」の方が「依報」、すなわち国土、土壤ということになるんです。インドでも「有情世間」と「器世間」が「不二」であると言われていたのかということとは文献上見つからないのでありますが、中国で言われていた「依報」「正報」に対応することはまず間違いないと思います。



環境と仏教

それではこの「身土不二」ということを最初に言いだしたのは誰かと言いますと、中国のお坊さんなんです。妙楽大師湛然（七一―七八二）というお坊さん、八世紀に中国におられた天台宗のお坊さんであったといわれております。

離身無別土者 此法身 身土不二之明文也

【維摩經疏記浄名疏卷六】（卍新纂統藏經第一八冊 No. 340.878c）
意味は、（仏）身を離れて別に（仏）国土はない。これが法身である。身土不二の教えである。

そういう文言が出てまいります。そこに「身土不二」「依正不二」という考え方の根拠があると今は見なされているようであります。そして、もう一つそこに挙げておいた言葉があるんですが、やっかいな言葉で、

三界唯一心 心外無別法

【沙石集】三・一）

【沙石集】という鎌倉時代の書物に出てくるんですが、これは仏教の唯識思想に基づく表現だと思います。三界というのは、「欲界」「色界」「無色界」という迷

いの世界です。迷いの世界は心の変現したもので、心を離れては存在しないと。ただ心だけが唯一の实在であって、心を別にして何ら存在するものはないんだという考え方、思想があるんですね。これはインド伝来の考え方だと思います。そんな具合にわずかでありますが、仏教の言葉の中には、人間と自然というのは対立するものではないんだという、逆に対立するものだという考え方は全然なかった、存在しなかったと言っていると思いますね。大きな自然の中に、人間もいれば動植物も存在する、東洋の考え方は初めから共生の状態であると言っていると思います。それが仏教の考え方だと思います。

しかも、「有情」「衆生」という表現があって、生きとし生けるものという意味ですが、その生きとし生けるものは、「地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人、天」と六つの世界を、生まれかわり死にかわりして繰り返して巡っていくんだという考え方があってですね。「有情」と言った時に、人間だけが「生きとし生けるもの」と考えるのではなくて、動物も含んで「有情」、生きとし生けるものという言葉が使われているんだということをお我々はしっかり注意しておく必要があると思うんです。ただその場合、植

環境と仏教

物です、草も木も「有情」と言われるのかどうかというのは、学者によって見解は様々でありますから何とも言えないんですけれども、一般には草とか木が生命、命を持つものだというふうには考えられない。六世紀、インドの仏教哲学者である清弁という人も、その草とか木というものは明らかに「有情」、命あるものだと言えないんだと、言っておりますから、一般的には仏教界において草木というものが「有情」の中に含まれるという考えは少なかつたんじゃないかなと思います。その点についてはまた後で触れてみたいと思います。

次に『維摩経』に見られる経文に注意したいと思います。

衆生之類 是菩薩仏土（衆生のたぐい、これ菩薩の仏土なり。）

これは、衆生が国土である、しかもそれが菩薩の仏国土（浄土）であるということです。わたくしたちは、とかく宇宙のどこかに仏国土、浄土が存在すると思いがちです。が、この經典は、衆生という国土こそ、実は菩薩の仏国土である、と述べて、仏国土とか浄土ということが考えられるとすれば、それは衆生そのものであると明言しているわけです。今、この講堂にみなさん、わたくしがいる、それが仏陀の国土、仏

の住居であるということです。物質的空間をどこか別な場所に見出すのではなく、衆生そのものが仏陀の国土であり、もし仏陀がどこかにおられるとすれば、それは衆生の中におられる、という意味のようです。

それでは、なぜ衆生が仏国土といえるのかといえば、衆生が鍛錬される、衆生が仏陀の知に入ること、あるいは衆生が聖者とおなじような根性のものになっていく、それによって仏国土というものが考えられてゆくからだ、とされます。

さらに次の經文に注意したいのです。

若菩薩欲得淨土當淨其心。隨其心淨 則仏土淨（もし菩薩、淨土を得んと欲すれば、まさにその心を淨くすべし、その心淨きに從つて、則ち仏土は淨し。）

心が淨らかなるに從つて、仏土もまた淨土である、それが土を淨めることである、ということです。つまり心が淨らかなるところに淨土が発生するということです。

これら『維摩經』の經文に接するとき、現今の環境問題は、その環境、国土に住む人間の心の問題であるということがはっきり示されているといえましょう。

環境と仏教

（2）不殺生について

さて、人間と自然との関係というものを見た時に、インドでは古くから「不殺生」という思想が非常に根強くありました。生き物を殺しちゃいけない。それがインド人の肉食を拒否し、菜食主義につながっているといえましょう。その根拠になっているものが、生き物を殺してはいけない、不殺生という考え方。それはインドにしっかりとありました。東南アジアになってきますと、後からお話しますけれども、「山川草木悉有仏性」「草木国土悉皆成仏」という考え方があり、植物にいたるまで悉く成仏するという、見解がありました。まず不殺生という問題について見ていきましょう。

不殺生、生き物を殺してはいけないというこの考え方は、仏教では五つの戒、五戒の一つとして考えられています。仏教だけではなくて当時のインドの社会においても「不殺生、真実（＝不妄語）、不偷盗、清浄、感官抑制（＝梵行）…マヌはこれ（ら五）を略説して四姓に（共通の）道なりと説けり」（MS. 10.63, 原訳1998, p. 291）というふうに言われるんですね。ですからこの五つのことは非常に大事な教え、道、人間が

歩むにあたって守らなければならないものとして考えられている。「蓋し不殺生こそは、一切徳目 (dharma) より優れたものと考えられる」(MBh. 12.257. 6cd, 原訳 1998, p. 291) その中でも不殺生、生き物を殺してはいけないという、この教え、道は他の一切の徳目よりも更に大事な優れたものというふうにならなければならないようにあります。ですから、この不殺生は、「最高の苦行」だとか、「最高の祭式」だとか、あるいはまた「最高の道」というような言葉でもって言われるわけです。ところがどうですか、みなさん方。この殺生という、生き物を殺してはいけないという、このようなことを人間としてできますか。もちろん、生き物ですから動物を含みますね。人間を殺してはいけないということは分かりますけれども、動物まで殺してはいけないということになったら果たして人間生活が成り立つのかという、そういう当然ということか素朴な疑問があるでしょう。インドにおいてもその問題が非常に根強くあったんですね。そこに紹介している資料をご覧ください。

世界中、あまねくどこでも生物は(他の)生物を(己が)生命の糧としています。魚は(就中顕著で弱肉強食)、共食いをしています。貴方はこれをどう思い

環境と仏教

ますか。(二三)

様々な仕方で、生類は生類によって生きています。生物は互いに食べ合っているのです。貴方はこれをどう思いますか。(二四)

「不殺生」と昔の人は言っていますが、いい気なものです (*uktam... puruṣair viśmitaiḥ purā*)。この世で一体誰が(他の)生命を傷つけないで(生きていられま)しょうか。よく考えて見れば、この世の中では不殺生の実践者など一人も居ません (*nāsti kaś cid ahimsakaḥ*)。(二八)

不殺生を旨としている行者でも殺生をしているのです。ただ、心掛けていて、殺生の程度が幾分なりとも少ないと言うことでしょう。(二九) (MBh. 原訳 1998, p. 286)

こんな表現、文言がインドにはあるんですね。殺生をしてはいけないと言うけど、現実問題、そんなことは不可能ですよ。だけど、組織的に許されるのはどういう場合であるかといえば、それは、お祭りを行うときの捧げ物として使う場合(時には客人歓待を含む)にはその動物を殺してもいいと。あるいはまた、緊急な場合に命を維

持するために肉を食べてもいいと、その二つの場合のようですね。その時にはこの殺生ということが公認されていたんだと言われているわけですね。そんなことを語るのが次の文章です。

「動物は造物主自らにより供犠のために創造された。供犠は一切の繁栄のために（創造された）。されば、供犠における殺害は殺害に非ず」(MS. 5.39. 原訳 1998, p. 279)

「(聖句が唱えられ) 水を注がれて浄められた肉は食してもよい。またバラモンが欲する時、規定に従って(供犠における食事に) 指名された時、及び生命に危険がある時には(肉を食してもよい)」(MS. 5.27. 原訳 1998, p. 276)

こんなことが言われておりまして、そこに殺生ということをしてはいけないというもの、こういう場合にはそれを認めざるを得ないというふうを考えられていたようです。そうすると、結局大事なことはどういうことかということ、殺生が避けられないものであるとするならば、殺生を必要もないのに、みだりに、殺生することだけはやめましょうよと、そういうことになろうかと思えますね。そういうインド人の考

環境と仏教

え方というのは、現在の環境問題にもそっくりそのまま適応できる考え方だと思えます。我々、毎日毎日、肉も食ばなきゃならん、魚も食ばなきゃならん、野菜も頂かないといけないわけね。だから、どうしても、毎日毎日、私は殺生のしつばなしですよ。だけでも、それは決してみだりに、いたずらに、あるいは必要以上にやってはいけないということが、我々現代人の環境問題に関連して心掛ける事柄であると理解しづらいかと思うわけでありませう。

(3) 草木国土悉皆成仏について

次、今度は東アジアにおいて広まった「草木国土悉皆成仏」のお話をしてみたいと思います。この考え方は中国で誕生して日本においても非常に大きな影響力を持っていた、そういう考え方なんです。この考え方が定着するまでにいろいろな論争があったようでありませうけれども、まず第一に問題になったのは、「草木」というものが命あるものなのか、つまり「有情」なのか、命を持たないもの「非情」なのかという、そういう論争がずっと長いことあったようです。その論争の内容は省いてしまいま

けれども、草木が仏になりうるのかどうかという問題を巡っては、結論的には、植物が「非情」であつても「有情」であつても、それは可能だというふうに考えていたようです。「非情成仏」という表現になるんですが、「非情」であつても同一の仏身より生じたものであり、同一の仏性（仏性というのには仏様になるという可能性、種というもの）をもつから、「非情」な草木も発心して成仏する。」と言うんです。植物にも仏性があるという考え方。仏性があるというのはインドの『涅槃経』というお経から出てくる考え方でありますが、それが中国においても「非情」である、草木であつても仏性があるんだという考え方があるから、「非情」でも成仏できるんだというふうに言われた。一方、「有情成仏」は、これはずいぶん日本に来て強く言われているんです。例えば、空海ですね、弘法大師は『卍字義』という書物の中ではっきり、「草木また成（仏）す、何ぞ況んや有情をや」というふうには、草木がまず第一に成仏できるんだから、「有情」が成仏できるのは当たり前なんだという、そういう見解を取ったんですね。空海が唱えた場合、その論拠は何であるかと申しますと、ちよつとややこしいんですが、一切の世界は、六つの要素、元素から成り立っていると考えるんで

環境と仏教

す。地、水、火、風、空、識と言いまして、堅さとか湿り気だとか、熱さ、動き、隙間だとか、それから心ですね。そういう六つの要素から成り立っているんだから、草木もこの六つの要素を持っているのであれば、草木も仏に成る。心があるということでありますから仏になることは可能である、というふうに空海は教えたわけです。そして空海より後、平安の中期に出た良源という人、この方は比叡山の中興の祖と言われる立派なお坊さんですが、この人も「草木既に生・住・異・滅の四相を具す。」（『草木発心修行成仏記』）。生というのは発生すること、住はそこにとどまる、異は変化する、滅はまさに滅するんですね。発生して、とどまって、変化して、滅していくという、そういう四つの姿を持っているから、草木も「発心、修行、菩提、涅槃」ということが、この「生・住・異・滅」という中に含まれるのである、と。だから、草木も「有情」である、草木が発心し修行する時に、「有情」もまた同じように発心して修行するんだと、高々と教えたのが、良源という人であったというわけです。こんなふうに、日本に来て、植物、草木が仏になるんだという考え方は非常に発展したと言っていると思います。

ところで、この考え方についてインドではどんなふうと考えられていたかということについて、ちょっと触れておきたいと思います。

「蓮等は早朝に開花し、*Chosāstaki* は薄暮、夜蓮 (*kunuda*) 等は月の出を待つて開花する。*Sami* 樹は雨雲の接近によって樹液を流し、*Lajjān* 等は手などの接触により葉が収縮する。実を結ぶ一切の樹木は特定の季節にのみ果実をもたらす。これらの樹木の働きは彼等が知性を有する証拠であると哲学者は論じていた。」

(*Tarkarāhasyaḍḍipikā* p. 158, 原訳 2009, p. 61)

というような言葉がインドにはあるんですね。花が咲く時期が花によって違っていませんね。ある一定の時が来ないと実をもたらずということもないんです。そこに、樹木というものは生き物なんだと見ていくという考え方があります。仏教の方では「二根（触覚）の生」という言葉があるんですね。「根」というのは感覚器官という意味ですが、坊さんが守らなくてはいけない律、戒律、規則があるんです、例えば雨期の時に坊さんが修行をしようとするんですけれども、外出すると猛烈に雨が降ってお

環境と仏教

りますから、そういう時に外出なんかしたら、草木の命を奪うことになってしまふ。あるいは、草を編んで、履き物、サンダルを作ったりする、むやみに木を伐採する、地面に穴を掘る、というようなことをすると、「一根の生」を害するという、そういうふうに言われるんですね。その感覚器官は何であるかと言うと、ジャイナ教の教えに従って、肌で感じる触覚が「一根」という言葉でもって示されていると言われるようになるんですね。インドの考え方にはこんな考え方もあったんですが、

「暑さによって葉の凋んだ樹木の樹皮、実、花も寒さによって又凋む。それ故に樹木には触覚がある。」(一一)

「風、日、雷の音により実も花も凋んでしまふ。音は耳で聞く、それ故に樹木は聴いているのである。」(一二)

「蔓草は樹木に絡み付いて四方に伸びる。眼のない者が道を探す事は出来ない。それ故に樹木は見ているのである。」(一三)

というような表現があるんです。あるいは、

「苦樂を経験し、伐られても再生する故に、私は樹木に生命 (jiva) を見る。彼等

は感覺なき者 (acatanya) ではない。」(一七) (Mahābhārata, 原訳 2009, pp. 62-63) というような言葉がインドの昔の古い文献には出ています。ですから、このインド人の考え方の中には、草木というものが、生きとし生けるもの、命を持つものなんだという、決して無感覺なものではないんだという考え方があったということが窺えます。

それに対してインドの仏教の方、仏典の中ではどうだったか。これはちょっとはつきりしないんですが、そこに二つだけ例を出しておきました。『摩訶僧祇律』という律の書物の中に、「樹のなかに命はないけれども」とはつきり、樹木の中に命はないと言っています。「人々に悪心を生じさせてはならない」(大正二二、339a)。それから『十誦律』という戒律の本があります。その注釈の中には「衆生は草木を舎となし村、聚落、城邑となす」(大正二二、74c-75b) ということがあります。つまり、衆生、生きとし生ける者は草木をねぐらにしている、住処にしているんですね。そういう意味において、樹木を伐採したりしたらいけないということになるんですけども、樹木そのものに命があるかどうかというと、どうもインドの仏典の中では

環境と仏教

つきりしないんです。こんな具合に、インドの古い仏教以外のものの考え方と、仏教の中での考え方は若干違う。立場によって、植物も命を持っているものなのか持っていないかということについては見解の相違があったんだということを、窺うことが出来るんだらうというふうに思うわけであります。

そんなふうには、極めて大ざっぱではありますが、人間と自然との関係について見てまいりました。それに対して、今、我々が直面している環境問題について、どういうふうに対処していったらいいのかということについて、最後にお話して終わろうと思います。

IV これからの課題

(1) 仏教には「少欲知足」(『大無量寿経』他)という言葉があるんです。これは欲することを少なくして、足りていることを知りなさいよ、満足していることを知りなさいよ、という考え方ですが、実は、こういう考え方は、西洋人、しかも経済学者

によっても主張されたんですね。一九七〇年代、エルンスト・シューマッハーという人が『スモール・イズ・ビューティフル―人間復興の経済学』という書物を出しまして、一九七〇年代当時、ベストセラーになったんです。そこでシューマッハーがどういうことを唱えたかと言うと、「仏教経済学」ということを言い出したんです。経済成長と物質尊重の根強い信仰によって、人間生活が大きくゆがめられている。そこで、今こそ、金では買えない非物質的な価値を尊重することによって、健全な人間の社会生活を回復せねばならない、と考えたわけです。その場合の「仏教」は何を意味していたかと言いますと、修行者が守るべき八つの正しい道、つまり「八正道」のことでした。その中の一つ「正命」を指針としなさいよ、と。「正命」は正しい生活ですね。仏教徒が掲げる正しい生活を近代人は学ぶようにしなければなりませんよ、と。ドイツ人、イギリスで育った学者が仏教経済学として提唱したんです。彼の考え方でいけば、経済成長、それから物質というものを盛んに獲得していくという考え方が、西洋人の中にはずっと根強くありましたから、そんなことをしていたら、環境は破壊され、本当の人間の幸せは得られないんだと。人間の本当の幸せは精神的なもの

環境と仏教

であると。物がたくさんあって、便利になればそれによって人間が幸せになるという考え方ではダメですよ、と。大量生産、大量消費こそが幸せなんだと考えられがちであった、そういう当時の考え方を否定して、そうじゃなくて、まさに仏教の「少欲知足」、正しい生活。その内容というのは、生活必需品を得るのに、武器の取引、酒を飲んだり、薬を使ったり、狩猟、釣りをするという、そういうことに関係する、あるいは巻き込まれて、必需品を獲得する、そういう姿勢は改めなさいと。まさに「少欲知足」の生活をやっていきなさい、というのが仏教の「正命」という考え方ですね。それをこの西洋の近代の経済学者であるシューマッハーが参考に致しまして、そういう生き方こそがこの時代においては必要なことと主張したということがありました。ですから、そういう意味において、仏教の考え方が西洋の経済学者によって採用されていたということ、歴史上の事実として我々は見ることができると言えると思います。

(2) 次に掲げますような言葉、歌の中に込められる精神性を、私たちは見直し、私たちの身の周りにおいて身に付けていくことが必要じゃなからうかとい

う思いで私は掲げました。一つは、

朝顔に釣瓶つるびんとられてもらひ水（千代女）

これは、加賀の千代女の有名な歌です。ここにいらっしやる皆さんの大半は「釣瓶」なんて見たこともない人ばかりだと思えますけれども、これは井戸ですね。水道が普及していない昔の時代は、皆、釣瓶という桶を先端に付けた綱を井戸に落として、それで水を汲んでいく。ところが千代女が朝起きて見ると、その井戸場の釣瓶の桶を引き上げる綱に朝顔が花を咲かせてまきついている。この釣瓶を井戸へ落としてしまったら、それによって可憐に咲いている朝顔の花が散ってしまう。それは可哀想だといって、一杯の水を井戸から汲むのをやめて、隣の家に行ってもらってくる。そういう内容の歌です。朝顔の命が大切なのか、自分の飲用としての水を優先するのかという、そういう時に、加賀の千代女は、朝顔の命の大切さを優先して、自分の水は他の家にもらいにいくという、そういう心ばせですね。今は水道の時代であります

環境と仏教

から、こんなことがひよつとしたら皆さん方には理解できないかもしれないけれど、
こういう心情ですね。朝顔、一輪の花であつても、そこに命を見出していくという、
そういう心ばせがやはり大事なことじゃなかるうかということを思えます。あるい
は、

命をば命となせしわが命　ご恩報じ永遠とわに生きなん（横山いそまつ）

横山いそまつさんという方は漁師さんです。最初の「命をば…」は、漁師さんです
から魚を獲りますね、その獲った魚の命をこそ、私は自分の命、生活の糧としている
のです。漁師だから魚を獲らざるを得ない。だけど獲る私としてはその魚の命に対
して、ご恩を感じてこれから一生生きていきますよという、そういうことを示す歌で
す。先ほどのインドの言葉の中に、生き物を獲らざるを得ない、殺さざるを得ない、
そうであれば、みだりに、むやみに、必要以上に獲るということは避けた方がいいと
いうことが言われておりましたが、それと同じことが、この、横山いそまつさんの歌

の中に見られるというふうに思うわけであります。

（3）最後に、環境問題は所詮は心の問題だということを申しました。環境問題を解決するのは私自身、一人一人の心の問題だということをお申しましたが、それに関連して最後に、こんなことを一つお互いに理解していききたいと思うわけです。それは、私という存在が自分一人の力によって生きているんじゃないかと、まさに私を取り巻く全てのもの、それは目に見えるもののみならず、目に見えないものを含めて一切合切、他のものとの繋がり、関わり合いの中にしか私の命はありえないんだと。そういう意味において、私という存在は「生かされている存在」なんだという自分についての自覚ですね。それが大事じゃなからうかと。そうしますと、全てのものに生かされているということは、言いかえれば、まさに私を取りまく環境によって私の命が成り立っている。あるいは環境によって私の命が守られているわけでしょう。そういうことにおいて人間と環境との関わりを理解していく。そういう時に、「生かされている私」という考え方が大事じゃなからうか。その立場に立ってみると、環境問題に対してどう対処したらいいのかということも理解できるんじゃないかと思えます。そん

環境と仏教

なことを巧みに歌っております、東井義雄先生の「支えられて私が」という詩を紹介して、終わりたいと思います。

「支えられて私が」

ざしきに上がればざしきが　ろうかに出ればろうかが　便所に行けば便所のゆか
が

どこへ行ってもどこへ行っても　私をささえていてくれるものがある

そればかりではない　妻も子どもも孫も　有縁無縁の人々も

生きとし生けるもののいのちたちも　石も土も火も空気も

わたしを支えておつてくださる　ああそればかりじゃない　忘れづめの

わたしを支えづめに　久遠の願いがわたしを　支えていてくださる

こんな詩があります。まさに私という人間は、石も土も火も空気も、そういう全てのものによつてはじめて支えられているんだ、生かされているんだという、それが私

という人間の本性なんだということなんです。であれば、この環境問題というのは決して人ごとじゃないというか、人間を離れた問題として、何か環境をどうかするということとは違う、あくまで私自身の問題として受け止めていく。それをしないことには本当の環境問題の解決になっていけないであろうということを、教わるわけがあります。

以上、ちょうど時間になりました。拙いお話で終始しましたけれども、こんな考え方が仏教の歴史の中にあつたんだと、あるいは西洋の人の考え方においても、この環境問題を巡っていろんな考え方が出てきているんだということを、一つ、頭に置いて頂いて、毎日毎日の私たちの生活に、何かそんなことが頭があれば、心があれば、いろんなものに対処する、その姿勢が違ってくるんじゃないかなろうかと、そんなことを思うわけがあります。

どうも、長時間にわたって、ご静聴ありがとうございました。

——二〇〇九年四月二四日——